

平成21年度企画事業

「教員免許状更新講習 ～効果的な集団宿泊体験とそのための体験活動指導法～」

国立赤城青少年交流の家

国立赤城青少年交流の家では、8月5日(水)～7日(金)の2泊3日の日程で、企画事業「教員免許状更新講習 ～効果的な集団宿泊体験とそのための体験活動指導法～(18時間)」を開催した。この事業は、「その時々で教員として必要な資質や能力が保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身につけることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目指す」教員免許更新制の目的に添い実施した。具体的な研修のねらいは、子どもたちの社会性・主体性・感性等を育むために有効とされる体験活動の実体験を通し、集団宿泊体験をより効果的にするための指導技術を身に付けること、また、体験活動の意義や必要性を児童生徒の現状をもとに理解し、体験活動を教育活動に取り入れた場面で必要となる時宜を得た適切な支援をするための指導力の向上とした。群馬、埼玉、栃木県より21名の参加者があった。

1日目の講義「子どもの成長と児童生徒理解」では、河村茂雄氏(早稲田大学教育・総合科学学術院教授)により、調査法による児童生徒理解の必要性や活用の仕方について学んだ。続いての「子どもの成長と児童生徒理解」では、香山リカ氏(立教大学現代心理学部教授)から、精神科医の視点から見えない心の声を聴く大切さや声のかけ方などについて、具体的事例をもとにした講義を受けた。

2日目、3日目は、「体験活動の意義(必要性)」について、工藤文三氏(国立教育政策研究所初等中等教育研究部長)による講義を受けた後、企画指導専門職を講師を務めた野外炊事、オリエンテーリング、AAP(あかぎアドベンチャープログラム)の実体験をとおり、安全管理、支援の視点などについて学ぶ時間となった。

参加者からは、「目的を整理したプログラムデザインを考えたい。」「日々の児童生徒理解があつてこそ体験活動の場で時宜を得た支援ができる。」「いろいろな学校、立場の先生と話ことができ、これからの子どもとの関わりのためになった。」などの声が聞かれた。教師としてのスキルアップにつながるとともに、参加者間のネットワークづくりもできた教員免許状講習となった。



朝のつどいの後の「記念撮影」

日 程

	8月5日(水)	8月6日(木)	8月7日(金)
9:00		朝食	朝食
10:30		講義 1.5h 【体験活動の意義(必要性)】 国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長 工藤文三氏	実習 3.5h 【体験活動の実際と教育活動へ活かすプログラムデザイン AAP】 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 岡部孝雄・小野義孝
10:40			
12:30		実習 3.0h 【体験活動の実際と教育活動へ活かすプログラムデザイン 野外炊事】(含昼食) 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 岡部孝雄・小野義孝	昼食 休憩
13:00	受付		
13:30	開講式・ガイダンス		
13:40			
14:00			
15:30	講義 3.0h 【子どもの成長と児童・生徒理解 調査法】 早稲田大学 教育・総合科学学術院教授 河村茂雄氏	実習 2.5h 【体験活動の実際と教育活動へ活かすプログラムデザイン OL】 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 岡部孝雄・小野義孝	評価 1.5h 「履修認定試験」
16:00			閉講式
16:30			解散
16:40			
17:00	宿泊オリエンテーション	講義 1.0h 【体験活動の実際と教育活動へ活かすプログラムデザイン 安全管理】 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 小野義孝・岡部孝雄	
17:30	夕食	入浴	
17:40			
19:00		夕食(情報交換会)	
20:30	講義 2.0h 【子どもの成長と児童・生徒理解 子どもの声を聴こう】 立教大学 現代心理学部教授 香山リカ氏	フリー(入浴可)	
21:00	入浴		
22:00	就寝準備	就寝準備	

*「AAP」: あかぎアドベンチャープログラム

[8月5日(水)]

【講義：子どもの成長と児童生徒理解 調査法】



〔講師〕

早稲田大学
教育・総合科学学術院教授
河村茂雄氏

現代の子どもたちの実態を確認した後、生徒個人がより自己実現できるような援助を適切に行うために必要な生徒理解について学びました。

教師の観察、面接で得られる情報には限界があり、それを補う手段として有効とされる調査法の活用例や教師の具体的対応のスキル獲得等についての講義を受けました。

【講義：子どもの成長と児童生徒理解 子どもの声を聴こう】

〔講師〕

立教大学
現代心理学部教授
香山リカ氏

児童生徒は、絶えず心の声を発信しています。この声は、教師に届いているのでしょうか。

精神科医として児童生徒と関わっている講師から、児童生徒の観察、心の声の聴き方、手のさしのべ方などについての講義を受けました。



[8月6日(木)]

【講義：体験活動の必要性(意義)】



〔講師〕

国立教育政策研究所
初等中等教育研究部長
工藤文三氏

10年ぶりに学習指導要領が改訂され、豊かな自然体験を通し内面に根ざした道徳性の育成が求められました。講師から、体験活動が必要とされる社会的背景、その進め方と配慮事項等について講義を受けました。

【実習：体験活動の実際と教育活動へ活かすプログラムデザイン 野外炊事】



〔講師〕

国立赤城青少年交流の家

主任企画指導専門職 岡部 孝雄

副主任企画指導専門職 小野 義孝

〔アシスタント〕

国立赤城青少年交流の家

事業推進係員 金井 麻耶

メニュー：カレーライス

児童生徒が行う野外炊事と同じ行程でカレーライスづくりを体験しました。「急がせてばかりの指導」が多い児童生徒への対応に気づく機会となりました。



【実習：体験活動の実際と教育活動へ活かすプログラムデザイン オリエンテーリング】



〔講師〕

国立赤城青少年交流の家

主任企画指導専門職 岡部 孝雄

副主任企画指導専門職 小野 義孝

〔アシスタント〕

国立赤城青少年交流の家

事業推進係員 金井 麻耶

講師の企画指導専門職から、児童生徒が実施する際に配慮しなければならないこと（引率教師によるコースの下見，天候状況による判断等）について説明を受けてから，グループごとにスタートしました。

3時間の挑戦は，児童生徒と同じように「自己との戦い」を実感する機会となりました。



【講義：体験活動の実際と教育活動へ活かすプログラムデザイン 安全管理】

〔講師〕

国立赤城青少年交流の家

副主任企画指導専門職 小野 義孝

主任企画指導専門職 岡部 孝雄

安全管理の基本的な考え方について確認をした後、事前準備と事前計画段階で押さえないといけない事項、実施時の留意点、事後指導の大切さ等について、国立赤城青少年交流の家での具体的事例をもとに講義がありました。



【情報交換会(夕食)風景】

2日目の夜、夕食を兼ねた情報交換会が開かれました。

本講習での気づきの共有や体験活動に対する意見交換が熱心に行われ、国立赤城青少年交流の家での時間を共有する仲間同士のネットワークづくりの場となりました。



[8月7日(金)]

【実習：体験活動の実際と教育活動へ活かすプログラムデザイン AAP(あかぎアドベンチャープログラム)】



〔講師〕

国立赤城青少年交流の家

主任企画指導専門職 岡部 孝雄

副主任企画指導専門職 小野 義孝

AAP(あかぎアドベンチャープログラム)を体験しました。グループで課題を解決していく活動を通して、コミュニケーション力や人間関係力を高める時間となりました。



参加者分析

21名(男：12名 女：9名)

校種別	小学校：14名	中学校：7名	
年代別	30歳代：5名	40歳代：7名	50歳代：9名
県別	群馬県：5名	埼玉県：14名	栃木県：2名

募集定員30名の7割である21名の参加であった。男女別では、男性12名、女性9名。年代別では、30代が5名、40代が7名、50代が9名であった。男女別や年代別の参加者数に偏りはさほどなかったと考える。群馬県5名、埼玉県14名、栃木県2名であった。全般的に活気と熱意のある事業展開となり、小グループ別の話し合いや協議等において、質的な深まりが認められた。2日目の情報交換会では、平素の教育実践を基にした様々な情報交換が活発に行われていた。

企画上の留意点

3名の講師と企画指導専門職の協働により企画・立案にあたり、運営は企画指導専門職が中心となって行った。7コマの講義・実習の相互の関連性を十分踏まえながら展開することに留意し、変化と説得力のあるプログラムとなるようにした。7コマ中の3コマは講師が、4コマは企画指導専門職が講師を務めた。最初の3コマは、子どもの成長と児童・生徒理解や体験活動の意義についての講義を配置し、残りの4コマは実習を中心に配置した。理論を踏まえての実践というデザインにした。

運営上の留意点

インフォメーションボードや壁面や窓ガラスを利用して、情報交換が積極的に行えるように配慮するとともに、参加者全員で共有化できるようにした。予め計画されていたものはもちろん、臨時の口頭でのインフォメーションも行うことにより、円滑な事業運営に努めた。

安全管理上の留意点

参加者が持参した「事前健康調査カード」を主担当職員と副担当職員が開講式前にチェックした。会場内には湯茶コーナーを設置し、参加者が適宜水分補給をすることができるようにした。疲労回復のためにも就寝時刻は厳守させ、職員が巡回を行った。緊急時の対応については、企画事業担当職員と事務室待機職員との連携で行うこととし、その手順については事前に十分確認をした。

成果

講義と実習の配置のバランスにより、大学等で行われる講習と違った、生きた体験活動を学び、宿泊が様々な効果を生んでいることに気がつくものとなったと考える。また、3人の講師の豊富な知識に触れ、情熱を感じるにより、平素の教育活動をふりかえるとともに、これからの教育活動をすすめる上での大切な視点を学び取ることができたにとらえる。

情報交換会を中心に、同県の教師はもとより、他県の教師とも情報交換ができたことも意義あることと考える。

今後の課題

参加者アンケートから、本事業は概ね好評であったと捉えることができる。今後の課題として、事業の広報を年度当初には完了するように計画する。今年度、関東近県では5月初めに、更新講習対象教諭宛てに、「いつ、どこの機関で更新講習を受講するか」の調査が行われた。また、更新講習を実施した大学によっては、開催要項に「講師未定あるいは講義内容調整中」と記載し、年度当初に広報を行っていた。定員を確保するためには4月当初の広報でないと遅いと考える。

担当者の所見

「講義・実習のバランスがとてもよかった」「研修全体として、児童生徒理解につながり、子どもをどう見ていくかという教師としてこれからも大事な視点に改めて立つことができよかった」「体験活動についてという大きなねらいの他に、河村先生・香山先生の話近くで聞く内容も組み込まれていて素晴らしいプログラムだと思った」等、プラスの評価をたくさんいただくことができた。

「夏休みに集中してできること、費用が安いこと、距離的にちょうどよいこと、泊まりで小旅行の気分が味わえること」とアンケートに記載された方がいらっしゃったが、受講者の多くの本音ではないかと考える。次年度に向けて、早い段階からプログラム内容・講師を練り上げていく必要を感じる。